

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目 古代日本語における動詞接続の研究

氏 名 阿部 裕

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、古代日本語における前項が接頭辞となっている〈動詞連用形＋動詞〉形態(以下、動詞接続)について考察したものである。動詞接続のうち、前項と後項が一体化しているものは一般に「複合動詞」と呼ばれる。複合動詞の多様さは現代日本語の特質の一つであり、その発達過程の記述は日本語史の構築において重要であるが、複合動詞の歴史的な発達過程には未解明の部分が多い。前項が接頭辞である動詞接続も複合動詞の一種と認められ、現代日本語にも「トリ決める」「ウチ明ける」のように多く存在するが、かような動詞接続が古代語にどの程度存在したのか、接頭辞化がどのようなプロセスで起きたのかなど、その歴史的な様相についてはほとんど記述されていない。しかし、前項が接頭辞である動詞接続についての検討は、古代語における複合動詞の存否などにも関連する重要な課題である。

本論文では、動詞接続史構築の個別実践として、「取る」を前項とする動詞接続「トリー」、「打つ」を前項とする動詞接続「ウチー」の古代語における様相を記述した。さらに、「トリ」「ウチ」の接頭辞化のプロセスについても仮説を提示した。

第 1 章では、上代日本語における「トリー」を扱った。上代語の「トリー」には、「～(ヲ)～ニトリー」という構文を形成する「トリ佩く」や「トリ懸く」、目的語を伴わず自動詞として使用される「トリ付く(四段活用)」や「トリとどこほる」など、前項が接頭辞化していると認められるものが複数確認される。また、「政事を行う」「とりまとめる」といった意味で用いられる「トリ持つ」も存在するが、これは前項と後項が熟合している複合動詞と認められる。これらの事実から、上代の「トリー」に複合動詞が存在したことは明らかである。「トリ」の接頭辞化は、本来は「手にする」意を表していた複合動詞「トリ持つ」が比喻などにより抽象的な目的語をとる用法や目的語の存在しない用法で用いられたことが契機となって起きたと考えられる。

第 2 章では、中古日本語における「トリー」を扱った。中古語の「トリー」には、具体的な目的語を有さない「トリ隠す」や「トリ重ぬ」、目的語を伴わずに使用される

「トリ申す」「トリ外す」「トリ集む」、副詞的に使用される「トリ立つ」や「トリ分く」、「解釈する」「勘繰る」といった意味に特殊化している「トリなす」など、複合動詞と認められるものが数多く出現する。また、上代から確認される「トリー」にも用法変化を起こしているものが存在する。これらの事実は、上代から中古にかけて複合動詞「トリー」が大きく発展していることを示すものといえる。

第3章では、上代日本語における「ウチー」を扱った。上代語の「ウチー」には、打撃を表さない「ウチ+他動詞」である「ウチ見る」や「ウチすするふ」、目的語の存在しない「ウチ+意志的自動詞」である「ウチ越ゆ」や「ウチ嘆く」、打撃を表さない「ウチ+非意志的自動詞」である「ウチ霧らす」や「ウチ靡く」など、前項が接頭辞であるものが多く認められる。「ウチ」の接頭辞化については、特定の「ウチ+他動詞」あるいは「ウチ+意志的自動詞」が慣用的になり、目的語が表示されずに使用されたことが契機となって起きたと想定できる。このプロセスが「ウチ+他動詞」と「ウチ+意志的自動詞」のいずれで起きたのかは確定できないが、「ウチ越ゆ」などの「ウチ+意志的自動詞」において起きた可能性が高い。

第4章では、中古日本語における「ウチー」を扱った。中古語には、発話・思考を表す「ウチ+他動詞」である「ウチ言ふ」や「ウチ聞く」、移動動詞を後項としない「ウチ+意志的自動詞」である「ウチ領く」や「ウチ忍ぶ」、自然現象を表さない「ウチ+非意志的自動詞」である「ウチ泣く」や「ウチ笑ふ」など、上代には見られない、あるいは少ないタイプの「ウチー」が非常に多く存在する。これらはいずれも前項が接頭辞と認められることから、上代から中古にかけて接頭辞「ウチ」による造語が盛んであったことが確認できる。また、先行論でも指摘されるように、かような「ウチ」の増加は『源氏物語』など中古後期の散文において特に顕著である。

以上の検討の結果、古代語の「トリー」「ウチー」に複合動詞と認められるものが数多く存在することは明白である。接頭辞を前項とする動詞接続が8世紀の上代語において既に認められることから、動詞接続の複合動詞化や動詞接続前項の接頭辞化は、7世紀頃には生じていた可能性が高い。また、「トリー」「ウチー」はいずれも古代から前項が接頭辞である例が確認されたが、接頭辞としての機能は「トリ」と「ウチ」で大きく異なっていた。接頭辞「トリ」と接頭辞「ウチ」に何故そのような差異が存するのかは定かではないが、差異が生じる理由の一つとして、接頭辞化する際のプロセスの違いが挙げられることを示した。

本研究の究極的な目標は、前項が接頭辞である動詞接続の様相を通時的に記述し、日本語動詞接続史の一端を解明することである。今後の課題として、中世以降の「トリー」「ウチー」の様相の記述や、「トリー」「ウチー」以外の前項が接頭辞である動詞接続の通時的な検討が挙げられる。